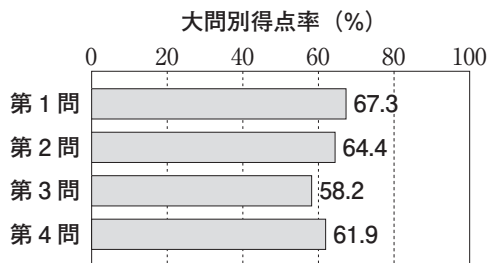
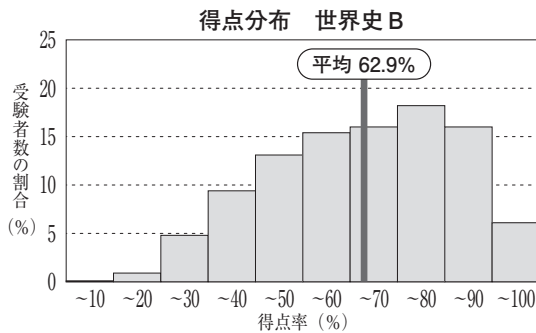


世界史 B

最後まで弱点の詰めを怠らず、学習を着実に完成させよう！

I. 全体講評

今回の平均点は62.9点であった。思ったより得点が伸びなかった原因は、センター試験レベルでは少々難解と思われる問題が複数存在したからと考えられる。それらは、問題としては勘違いしやすい内容を含んでいた。今回の模試で間違えた受験者は、2019年1月19日に行われるセンター本試では間違えないでほしい。この部分を除くと、前回の模試から順調な伸びを見せた。今まで古代史・中世史・近世史に比べて正答率が低かった近現代史も、基礎は出来たようで正答率が変わらなくなった。今回の模試の経験を生かして、弱点克服に最後の努力を期待したい。



II. 大問別分析

第1問 世界史上の植民地

歴史的人物が活躍した時期を確実に押さえよう。

第1問の得点率は67.3%で、全大問でもっとも高かった。この大問は基本的な問題が多かった結果と考えられる。全小問中最も正答率が高かったデズレーリとアイルランドを答えさせる[8]の84.6%、ウィルソンが正答の[1]の82.0%、コンゴの宗主国と位置を答えさせる[5]の81.6%は、いずれも近現代史の問題であるから満足すべき結果であった。この大問中40.9%と正答率が最も低いケネーが正答の[7]は、ケネーが18世紀の重農主義者と知っていれば間違える問題ではなかった。ナポレオン3世のインドシナ出兵が正答の[6]の53.4%も、基本的事項であるから不満な結果であった。この問題については、他の選択肢の人物の事績も確認しておく必要がある。近現代史まで学習が至っていると感じさせたのは、インドネシアのイスラーム同盟が正答の[3]の62.3%、オーストラリアの外交政策を問う[9]の71.5%である。ともに学習が至らない傾向にある部分であるから、この結果は満足できる。同じくアクスム王国とアフリカ統一機構について問う[4]の64.9%も、アフリカ史は学習が手薄になりがちなことから見ると満足できるものであった。シェアロッパー制に関する[2]の71.6%は、基本であるからもう少し出来てもよかったと考える。

第2問 世界史上の社会階層

中国周辺史を補強しよう。

第2問の得点率は64.4%であった。ほとんどの問題が基本的であったからと考えられる。とりわけ王安石が正答の[11]が正答率84.3%と、全問中二番目の高さであったことは安心できる結果であった。これに対して、古代朝鮮史の新羅とその位置を問う[10]の55.7%と、チベット仏教のパスパとツォンカパを問う[12]の56.3%は、不満が残る結果となった。これらは、朝鮮史とチベット史の基本を問う問題である。センター本試までに、中国周辺史を

補強しておこう。イタリア王国成立とローマ教皇領の統合に関する[15]の45.5%も、残念な結果であった。イタリア王国の成立は1861年、ローマ教皇領の統合はプロイセン＝フランス戦争中の1870年、という近代史の基本の理解が徹底していなかったようである。同じように、ムハンマド＝アリーが正答の[17]の58.9%も残念な結果であった。他の誤文が基本的なものであったことから、間違える問題ではないと思う。プロイセンのシュレジエン獲得の時期を問う年表補充の[14]は、オーストリア継承戦争がプロイセンによるシュレジエン占領を機に起こった戦争と考えると、62.2%という結果は満足できるものではない。アウラングゼーブとオーストリア＝ハンガリー帝国についての正誤判定の[18]の66.4%も、基本な内容を問うているので満足できるものではなかった。アフガーニーが正答の[16]の75.8%と、ルターの宗教改革に関する時期指定正文選択の[13]の72.1%は健闘したといえる。

第3問 人間と自然の関わり の歴史

グラフ問題に慣れよう。

第3問の得点率は、全問中最も低い58.2%であった。センター試験レベルとしては難問の[21]と[25]があったからである。全問中最低の23.2%という正答率だった[25]は、飛び杼の発明、ワットの蒸気機関改良、綿繰り機の発明の年代整序であった。飛び杼も綿繰り機も手動であるということを知っていたためか、飛び杼→綿繰り機→ワットの蒸気機関の改良にした受験者が59.2%もいた。二番目に低かった29.4%であった[21]は、カラハン朝が10世紀末にサーマーン朝を滅ぼしたことと、ピサロがインカ帝国を1533年に滅ぼしたことを知っていた上で、グラフとの関連を読み取らねばならない難問であった。ダマスカスに関する[26]の83.2%、占城稲に関する[24]の74.2%、ノヴゴロド国に関する[19]の72.9%、東ゴート王国に関する[22]の70.8%という結果となった各問題は、基本がきちんと押さえられている結果が確認できた。しかし、インダス文明についての[23]の40.8%と、洋務運動についての[27]の55.1%は、不満が残る。前者においては、ヴェーダがインダス文明でつくられたと考えていた受験者が49.0%もいた。ヴェーダはインダス文明滅亡後にインドにきたアーリヤ人がつくったものとするのは、古代インド史の基本である。また、変法

運動を行った康有為は洋務運動に関わっていないことは、近代中国史の基本である。逆に「博物誌」を著したプリニウスについての[20]の58.4%は、ローマ文化史の細かい部分と考えると健闘した。

第4問 社会主義の歴史

近現代史の最後の確認の学習をしよう。

第4問の得点率は61.9%であった。社会主義がテーマである以上は、近現代史が中心になるので、この段階では妥当な結果であった。この大問中、51.7%と最も正答率が低かったのは[31]で、ソヴィエトが血の日曜日事件に始まる第1次ロシア革命で成立したことが正答である問題であった。ロシア革命の中心となり、国名になっていくソヴィエトの歴史を確認する必要がある。マルクスとフェビアン協会についての[28]は53.7%であった。マルクスは分かったが、フェビアン協会でなく第2インターナショナルを選んだ受験者が43.3%いた。第2インターナショナルの修正主義を念頭においたものと考えるが、第2インターナショナル総体は議会主義を唱えてはいない。オーウェンに関する[29]は53.6%であったが、社会主義の基本である。ラダイト運動とオーウェンは関係がないので、この数字は納得できない。74.5%とこの大問中で最も正答率が高かったのは、鄧小平の「4つの現代化」が正答の[36]であった。抗日民族統一戦線に関する[35]の67.5%も、中国現代史がきちんと押さえられていることを示した満足すべき結果であった。また北大西洋条約機構(NATO)についての[30]の69.4%と、ドイモイの年代を考える[34]の60.1%は、戦後史ということ考えると健闘したといえる。難問と考えられるフランス・日本・イギリスの政治の流れを問う[32]の57.7%、チャーティスト運動とメキシコ革命の正誤判定を問う[33]の65.8%の結果は、センター本試が期待できる数字であった。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆知識の精度を上げ、学力を完成させよう。
時期指定正文(誤文)選択や年代整序6拓、年表補充問題などの対応力を完成させ、地図や図版などを参照しつつ地理的・感覚的把握に留意しよう。直前まで世界史の学習を行おう。センター本試での健闘を祈る。